

総じて戦法を習うということは、例えば囲碁を打つように、昔の人の手筋を習ってからようやく我が手からも術が出るようになる。そうであれば、昔の人も碁盤上の縦横十九路の区画が無ければ、どうして囲碁を用いることができたであろうか。囲碁には約三百六十の画路があり、古今この外に碁石が出るようなことは無かった。にもかかわらず、又古今を通じて同一の手段（棋譜）も存在しない。

我が軍法は、本来は四武であったが、この四種が分かれて、握奇・八陣・陰陽・奇巧・権謀・形勢など三百八十有四ある。これらをまとめて気・備・勢の三綱としているものであるが、全てが兵法家にとって（囲碁でいうところの）画路があるようなものである。ある時はこれを奇正と云い、あるいは鳥雲と云い、あるいは伏兵と云う。これらを囲碁の緯（しゃく）・沖・筈（さつ）・征（しちよう）・点・拶といった手筋（注）に例えることができる。その習いはかねてからあるが、その用法は計り知れないほどである。それ故に優れた将は、常に四武を心として権、綱紀を離れず、となるのである。私が毎度用いる四武は、第一には奇兵、二には伏兵、三には陰兵、四には鳥雲である。奇と云うのは常々云うところの奇ではない。有るものを無いようにし、無いものを有るようにして、我が形情を敵に知らせない。又、有るものはそのまま有り、無いものはそのまま無いようにして、真偽相半ばして敵が判断したり決心したりすることが出来ない。これを一個の奇兵とする。伏と云うのは、すなわち径路に兵を配備して我軍が敗れて退却するのを救い、あるいは疲れている味方を助け、新たな部隊が投入されるまでそれに代わって機（チャンス）を保持する軍勢である。陰兵と云うのは、敵の不意に備える軍勢である。敵の間にも味方の中にも、山林村落にも、居場所を定めること無くして、合図によって兵を発するものである。鳥雲は変化が窮（きわ）まり無く、集散に常態がない。鋭い士卒、衝撃を与える騎馬、有利な態勢にある兵を時機に応じて連続不断に発し、決して窮まる所を示さないものである。私の生涯の軍（いくさ）は、皆この四武を宗とする。

そもそも戦法とは、必ずしも敵を討つことのみを勝とはしない。例えば、我が千人の兵を亡くして、敵の百人を討ち取ったのは、勝といえども善の善なるもの（最善のもの）ではない。そうであればこそ、「上兵は謀を伐ち、其の次は交を伐ち、其の次は兵を伐ち、其の次は城を伐つ（『孫子』謀攻第三の文）」と云われるのである。それは、城攻めを命じる者が、どうしようもなくなって生身の人々を傷つけることになるからである。若干の敵兵の命を損なっても敵を打ち負かすことを己一人の心の中で娛しみとしながらも、相手を敵として強く憎むことがあってはならない。私が按ずるに、徳をもって敵を屈服させるのが上兵である。謀をもって敵を亡ぼすのは其の次である。兵をもって敵を撃つのは下術である。兼ねてから我が備えを節制（ほどよい状態）にして、心の四武と外の四武とに勤めて怠ることが無ければ、兵の徳は自然にあらわれて、それこそが真の奇備となるのである。備えというのは、すなわち己のことである。自己の中に有して徳が奇勝をなす、これを上兵と言わずして何というか。

（注）「綽」は相手の石の進行を抑えるような形で、相接する自分の石から斜めに打つ手であり、「征」は逃げようとする相手の石を、斜めに追って当たりとし、逃げられなくすること。